

親鸞さまの

【本文】

自力諸善のひとはみな

仏智の不思議をうたがへば

自業自得の道理にて

七宝の獄にぞいりにける

【意識】

阿弥陀様を抛り所とせず、自らを
抛り所とする人はみな

自らの考えと言葉を頼りに仏に成ろうとしていきます。しかし、阿弥陀様のお智慧は、そもそも人の量り知ることとの出来ない深さと広さを備えておいてです。そのお智慧を頼りとせず、自分に始まって自分に終わろうとしているのですから、その通りの結果になります。

つまり、極楽に往くのではなく、自分の作り上げた、一見きらびやかな世界の中に終始するという結果です。

【私の味わい】

ネット等を通して、これまで様々な人生相談のご縁がありました。今日ではビデオ通話も手軽になりましたので、遠く離れた海外在住の邦人の方からも相談が寄せられます。その都度、人間は時代、場所が違っても悩み事とは無縁でいられないという思いを致します。それぞれに頭を悩ませる問題は人間関係、愛情、仕事、お金、病気等多様です。ご事情を聞く度に、人には歴史があり、禍福はあざなえる縄の如しとの思いを改にいたします。

しかし、生きている間の葛藤は、逆さまに言えば命終わるときには置いていかざるをえない葛藤だ、とも言えるのではないのでしょうか。命終わるとき、お金は置いていかざるを得ません。仕事、人間関係も同様でしょう。

では、命終わるということが意識された時、人はそこに葛藤しないか、終わるのだから終わるが宜しいと泰然自若としていられるのでしょうか。少なくとも私はその自信はありません。また、その心境に至ることを勧めるのが浄土真宗ではありません。

上記のご和讃には、自分を中心にして、自分の世界観の中で生きる人には自ずとその世界が行く先となるとお示しです。しかし、阿弥陀様を抛り所として、阿弥陀様のお心に生かされるものはお浄土がその往く先になる、とも言外にお示しになっていきます。先往く人も、後から来る人も、これから往く私も同じ処が極楽浄土です。命終わってまた会える、案ずるなど阿弥陀様が仰るのだから。南無阿彌陀佛。(悠水)